
霊能白拍子 管弦舞

津田 紫御

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霊能白拍子 管弦舞

【Nコード】

N87540

【作者名】

津田 紫御

【あらすじ】

―その女には全く仕事が来なかった…。京都に、まるで平安時代の様に白拍子の扮装をした若い女性の霊能者がいる。その名は管弦舞^{カンゲンマイ}やかなその女の元に今夜、誰かが助けを求めにやって来た…。

レイノウシラビョウシ カンゲンマイ（前書き）

その女には全く仕事が出来なかった。場所は関西、京都。京都の西に、まるで静御前の様に白拍子の格好をした若い女…。その名は、カンゲン マイ。彼女は、真の霊能者なのか。

レイノウシラビョウシ カンゲンマイ

―その女には全く仕事が来なかった…。場所は京都の西地区の竹街道を左に逸れていった鬱蒼と茂る仄暗い竹林道を登ったら、薄気味悪い住宅街が突如現れる。この住宅街を林道沿いに真っ直ぐ奥へ行った所に、彼女の家は建っている。が、古びた日本平屋で、家屋は結構錆び付いていた。女の名は管弦舞カンゲンマイと言う。黒髪が長く、肌が色白である彼女は、年齢不詳であるが、二十代には見える。自称・占い兼・霊能者 と言う。しかし、外に出勤に出ている様子は無く、代わりに明け方五時頃、読経が彼女宅から度々聞かれている。近所からは女一人暮らしと噂が囁かれている。が、あまり良い評判は聞かれない。何やら、金烏帽子を被り、巫女の雅楽装束を着ていて、白拍子の様である。日常茶飯事、その成りで買物にも出掛けていて、後ろ指を差し笑う者、興味深く注視する者 など他人の反応も様々であった。そして。時々、管弦舞の家から、年配女の怒鳴り声が轟いた。『今日と言う今日は家賃を払って貰えますからね!! 良い年した女でも、身よりの無い娘だと思っから今まで待つてやったのよ!』荒れた年配女の怒声が響く。続いて白拍子は静かに『わかっていきますって: ですから、仕事のオフアがなかなか来なくて:。今月末迄に整えときますし、また改めて貰えませんか』こんなやりとりが近所に聞こえる事から、年配女は『大家』なのだろう。ある夕暮れ、彼女は夕食の下ごしらえに台所に立ち、白菜を切っていた。そこへドンドンと乱暴に玄関の引き戸を叩く者がいる。やって来たのは大家の年配婦人である。少々肥え気味。眼鏡をかけて、厚化粧で、逞しい外見の大家は『今日こそ払うもん、払ってもらいまひよか。アナタばかり特別って訳にはいかないのよ』と突っかかる。舞は、『すみません。仕事のオフアがあまり来なくて、低迷状態になってしまして。ですが、今月末迄には用意を何とか整えますので、何とか出直しては貰えませんか』大家はフン、と鼻で

笑った。『仕事のオファーが来ないってどうゆう事？あんだ、本当に霊能者なの？』管弦舞は黙って大家を見据えている。『霊能者だか何だか知らんけどね、仕事が来なければただの無職娘やないか？そんなんやから貰い手もおまへんねや！全くあんだを育てた親の顔が見たいわ！…あ、せやった。あんだには、両親居なかったねえ。』くっくつと口を歪めて大家が笑った。管弦は両手を合わせ膝をついて黙って頭を下げている。『…ふん。まあ良いわ。今月末まで待ってあげる。インチキ臭い商売で、インチキ臭い格好して、いい年して、貰ってくれる男も無しなあんだが度々滞納してる家賃を、今月末迄どうやって準備してるか、見物よ！』大家の年配婦人は、意地悪に口を歪めて笑い、大きな音を立てて玄関の引き戸を閉めた。『……………』白拍子姿の管弦舞は、俯いて両手をついた姿勢のまま、固まっていた。勿論、大家の、かような言動に、傷つかない者は居ないだろう。しかし、若き白拍子の瞳には、別なるモノが映っていた…。其の壺…『赤子の背中』…時刻は夕方7時過ぎ。晩秋の風が冷たく、やはり陽がどぷりと山に沈んだ。『全くあのインチキの、こすぷれ娘、仕事しない癖に、どーやって月末、滞納家賃払うんだろ！』舞が滞納始めたのは、3ヵ月程前である。以前も、やはり滞納時期があったが、仕事の羽振りが高じたのか全額家賃を納められた。が、大家は考えた。小娘の職業が本当なら、ふざけた職業だ。小娘のインチキ臭い『霊能者』なる仕事では、食いぶちも稼げるものか。そんな胡散臭い小娘に、ウチの家賃（1ヶ月・七万五千元）も払えるのか？『…ああ！やっぱり、あんなインチキ霊能娘に、家賃すべきじゃ無かったわ！』大家は齒軋りをして、暗い竹道を下がって、自宅への道を歩いた。大家が自宅にたどり着くと、夫が『遅かったのう。早く飯、作ってくれや。子供も泣いとおるわ』と妻に文句を言った。『解ってるわ！私には家事があるさかい、あんなが管弦の所に滞納家賃の請求に行ってくれんと！ああ忙し！可愛い息子にも乳やらんと！』大家婦人は四十五歳、夫は四十七歳だった。実は四十歳で高齢結婚した夫妻である。その上、子宝にも恵

まれ無かったのだが、昨年妊娠が発覚し、無事に半年前に、四十五歳と言う高齢出産を果たした。だから、大家の喜びは例え用のないものだった。『よしよし、今、オッパイ飲ませてやるからね』大家は、化粧浮きした顔を弛ませて、にんまりと笑い、赤ん坊に近寄った。『んふふふふふふふ』赤ん坊を抱き上げ、自分の乳房にグイッと押し付けた。『ば：ぶぶぶぶぶ：』：：：暫くして《：せ：は：らね》と、微かに話し声が聞こえた。大家婦人は『？何か言うた？』と、隣の居間でテレビ見ながらくつろいでる夫に聞いた。夫は『ああ？ワシは何も言うてへんど：』とのんびり答えた。〈何や、空耳か〉と大家は、赤ん坊に向き直った。『！うわああっ！』と大家は、一瞬、目を見開いて、短い叫び声を上げてしまった。何と、赤ん坊の背中に、一瞬、人の顔の様な物が見えた。様な気がしたので、慌てて子供の全身をくまなく点検した。赤ん坊の背中は、ベビーウェアのローブが捲れて背中が少し出たので、着直してやった。どうも母乳を飲もうとしない。訝しながら、仕方なくベビーベッドに寝かしつけた。しかし、大家は気味が悪いものを感じた。空耳に違い無いだろうが、こう聞こえた。『婆臭え乳は要らねえ。』――さて。時刻は、午前零時頃。管弦宅では、舞は遅い入浴をしていた。11月半ばの夜は寒い。舞は、寒さが苦手だった。が、風呂の旧湯沸かし機は壊れていた。実はほんの二年前に、この借家に越して来たのだった。その頃で、取付け後、十年は越している：との事だった。しかしガスは勿論通しているので水道から湯を溜める。舞は湯船に浸かった。『：うう：なな何て寒いんじゃ：』ブルブル震えながら、髪を軽くパラパラっと水気を切った。烏帽子を被らない被髪の方が彼女は大分若く見えた。無論、白拍子の格好している普段でも若くは見えるが。濡れた前髪から光る雫が仄かに火照る色白い顔を伝い、鼻先へと流れ落ちた。洗い立ての長い髪を指で弄っていると、風呂場の外から〈ニャーオー〉と猫の鳴き声が聞こえた。『金太郎？』と、舞は窓を開けた。（金太郎）と呼ばれた猫は、金茶色の雄の虎猫だった。（インチキ霊能娘）と罵倒されている舞だが、

彼女に霊能力が有るのは事実だ。一つは、人ならざる者の声を聞ける（超力　の耳を持っていた。）《―これは失礼。出直す方が良いかにか？》金太郎は腰を低くしている。『待つて。今、風呂出るわ』舞は窓を一度閉めて、サッサと身体を拭いて、薄い桃色の長襦袢を着た。戸を開けてやると、猫は静かに入って来た。《―姫の仕事はどうかな？うまく行ってるかにか？何やら、家賃の事で、どやされたと、仲間が言ってたが》金太郎は、室内では本当にお喋りである。舞は、金太郎に餌を入れてやった。金太郎は勢い良く（はぐはぐつ）と食べ始めた。どうやら腹を空かせていた様である。『そおなんじゃ…。ああ…。この様な所だと知ってれば、この家を借りようなんぞとは思わなかったのに。妾ってほんつとくにお馬鹿じゃ…。』舞は、嗚呼、と力無く顔を落とした。すると金太郎が言った。『普通に店で、（あるばいと）なるもの、して支払う訳にはいかぬのか？』舞はふつと笑った。『…それは皆、簡単に言うてくれる。簡単に（バイト）につけるなれば、かような程苦労してませんよ』暗い目で舞は呟いた。『姫は、色々な事に臆病になりがちですぞ。』舞は、金太郎を見て、ふふ、と暗い笑いを漏らした。心無しか舞の顔色が青い様だ。『…姫？湯冷めでもされましたかニヤ？』舞は、しばし黙っていたが、口を開いた。『…おお。嫌だ。やはり、こんな借家なんぞ借りなければ良かった…』金太郎は呆れた声で『何をしなみじみと…』と応えると、舞は続けた。『…かれとおるのじゃ…』金太郎は、『ええ？』と耳をピンツと立てた。『…霊に憑かれとるんじゃ。大家殿は…』金太郎は瞳孔を開けて舞を見た。（ヒュウウウウウウウオオオオオオオオオ）もう来る冬の夜風が急に激しく吹き荒れた。――さて。大家宅では暫く、よく眠れない夜が約、一週間続いていた。ある朝。ゴミ出しに出た大家は、寒いのに外で井戸端談議する近所の年配主婦三人に会釈した。『あらまあ、お早うさん！』主婦達は『あら、奥さんお早うございま…』と言いかけて全員　固まった妙な顔をした。大家は『？どうかしまして？』と問うと、主婦達は『…お…奥さん…今日は鏡、見ましたの？』

は?』『…目の回りに、ひどいクマが出来てますよ。』『クマ…?
あ、あらやだゝ ま、最近ちょっと睡眠不足なんだわゝ』と大家は、
おどけて見せた。主婦達との会話も程々にして直ぐに自宅に戻り、
鏡を見た。『……やだ…。目の回り真っ黒…。化粧しなくちゃ…』
慌てて、メイクポーチを取り、ファンデーションを塗りたくる大家
の背後で、男の声が聞こえた。『またやっとなるんか…婆さんが厚化
粧しても何も変わりやしねえよ』大家は夫に『ああ?何やて?もう
一回言うてごらん!』と、ガラガラ声で怒鳴った。そこで、はっと
した。(夫は、今日は仕事で、朝方から家を出て居ない筈。…そ…
それじゃ今喋ったのは…)脇を見ると赤ん坊がすやすや寝ていた。
(今、この家には私と坊や以外、だ…誰も居ない筈…)急に恐怖心
が強くなり、大家は悲鳴を上げた。『う…うぎゃああああああ
あああああ』赤ん坊は叫び声に驚き、激しく泣き始めた。『お
ぎゃあ…おぎゃあ』——実は不眠の原因は、これである。何だか
最近、空耳がひどくなった。そのうえ毎晩、怖い夢もよく見るので、
自分でも不眠症を疑った。(病院で見てもらおうか?)大家は、氣
を取り直して化粧し、茶色のコートを羽織った。赤ん坊を何故か連
れて行く氣になれず『坊や、すぐ戻るわね』と声かけて、大家は家
を出た。西竹林町南に車道隔てた『京都快生病院』で受診を受けた
大家に、三十代位の鋭敏な目つきをした医師はこう伝えた。『…ま
あ、こう言うご相談は、一応心療内科の分野になると思いますが、
うちで見させて頂いた限りでは脳波や、耳鼻科の聴力にも全く異常
は有りません。要するには、体調を崩す病になる病因は全く異常が
有りません。』大家は、異常が無いと聞き、内心安堵した。が、直
ぐに氣になり医師に伝えた。『特に原因も無く、こんな不眠症にな
るんですか…?幻聴も…?』医師は『体に異常が無いとすれば、心
療内科でカウンセリングの上、薬事療法と言う事になります。』『
…心療内科…』——それではまるで私が鬱病みたいじゃないか。
言葉には出さないが、俯いた大家の表情に表れたのだろう。医師は、
こう言った。『お子様を、その位の年齢で出産された方々の中には、

あなたの様に相談に訪れる患者さんも多いです。お産は母子が命懸けなだけにその緊張感に、これからの不安が来ているのでしょうか。決して精神の病と言う訳では有りません。良い心療内科の案内状をお渡ししておきます。』大家は、失礼な気恥ずかしい様な、納得行かない気分で帰宅した。――しかし。その夜から空耳は益々ひどくなり始めた。ハッキリとした男の声で『殺す：殺してやる：』と、物騒な言葉が、昼夜問わず、アチコチから聞こえて来る様になった。家の中で『誰よっ？いい加減にしないよおおっ！！』大家は、洗濯物を畳む時も、食事を作っている最中も、両手を振り上げて暴れ回る様になった。まるでそこに誰か人が立っているかの様に。大家の夫は『お前：頼むよ。しっかりしてくれよおう：』と妻に情けなく懇願するしか無かった。赤ん坊は激しく泣いている。夫は『うるさいっ！いい加減に泣きやまんかあっ！』と、赤ん坊に八つ当たりした。状況は泥沼化していた。そのうち大家は、『もう家から一歩も出たくない』と外出拒否をする様になってしまった。『何をしている！？今日こそ病院に行くんじゃ！』『嫌！私は命狙われてるんやで？あんたは鬼やわ！』こんな状態で、妻を病院に連れて行けない夫も次第にやつれて行った。ある朝、妻に代わってゴミ出しをしている夫の耳に、外で井戸端談義する主婦達の話し声が聞こえた。『管弦さんの所に、何か一昨日、誰か来てたみたいね。』『彼氏？』『いやあ：そんな感じには見えなかったですよ。何か、背広姿のサラリーマン風のオジサンだって。管弦さんはまだお若いでしょう？そのお客はもう四十代か五十代位の方だったし。』『：援助交際とか』『：うゝん：そんな感じにも見えなかったなあ。何か「ありがとうございます」とかお礼していたし。管弦さんってお祓い屋さんでしょう？心霊か何かの相談者やないかしら』大家の夫は、そう言えば、妻が異常になったのは、管弦宅に家賃の請求に行ってからだと思った。―否。一概にも言えない。妻は性格欠点が多く、人の話を聞かない。物事が滞ると八つ当たりする、怒鳴りつけるなどのトラブルメーカーだった。管弦舞の姿は二年間で一度も見た事

が無い。その胡散臭い娘が、何か呪詛でもかけているのだろうか。大家の夫はそう思うと、その胡散臭い娘を問い詰めてやろうか、と思ったが、先ずは話を聞く必要が有るだろう。夫はゴミ出し終えてから、家の借り主の管弦宅に向かう事にした。……さて。借り主の管弦宅の玄関前に来た大家の夫は考えていた。（……さあインチキ娘め。どう締め上げてやろうか……）もしも、ここの管弦が、自分の家庭に呪詛でもかけているのか？と思うと、底から腹立たしさがこみ上げて来た。夫は、想像だけの憎しみで、震える手で呼び鈴を押した。リーン……ドンドンッ！ドンドンッ！戸を乱暴に叩く。――
：『はい……今開けます……』中から、うら若い女の声が応えた。――カチャッ……カラカラ……。『？……何か御用ですか……？』夫は口を開けたまま目を見開いて間拔けに驚いた。噂通り白拍子の格好をして居り、まるで時代劇に出演する、聡明そうな切れ長の目をした和服美人だったからだ。『……お宅が……管弦はんか？』夫は間拔けた目つきでじろじろと管弦舞を見上げる。『はあ……如何にも。私が管弦です。』女は、静かな声で応えた。『……大家さんですよ？どうぞ……寒いので。中へ。』？夫は、又驚いた。自分と面識無いのに、何故この女はワシを知ってるのだろうか？と。玄関の上がり蒲池かまちに上がったら、もう茶の間である。特にリフォーム等手入れはしていない様子だが、玄関と茶の間を区切る硝子障子戸の硝子部分だけは、桜模様の透け帽子のステッカーを丁寧に貼ってあった。そして茶の間の正方形のこたつ机に和柄の赤いこたつ布団がかけられて、机にセブイレブンの袋が置いてあった。肉まんの良い匂いがしている。昼食を取ろうとしていたのだろうか。女は、熱い茶を出してくれた。『前に、買い物先で、大家様と歩いてらっしゃるのを見ましたよ……。』月末のお家賃なら、大家さんの講座に振り込みましたよ……。『管弦は、自分も入れた茶をすすりながら話した。目だけは警戒する目つきで大家の夫を見た。『今日は、何の御用でした……？』……管弦さん。藪から某だが……。あんたがもしかして、ワシの所に呪詛か何かかけていますのか？』……呪詛？』管弦舞は目を細めながら聞き

返す。『ワシの妻が、ノイローゼみたいになって、毎日毎日、変な声が聞こえると言うんじゃない！病院では精神科に行けと！あんた、霊能者なら、何か解らんか？』夫は、やや興奮気味に問い出した。管弦舞は『お：落ち着いて下さい。落ち着かねば話も出来ません。確かに。奥さんが、お家賃の話をしに来られた時、私には視えませんでした。』大家の夫は、ゴクリと唾を飲み込んだ。『：やっぱり憑き物が：？』『：。奥さんに。と言うよりは、お子様、授かったんですよね。お子様を一度連れて来て頂けますか？』管弦は静かに言う。夫は『つ：妻には、あんたの所来る話をしていない！祈禱して貰っても、料金の方は：』と顔を歪めて困っている。すると管弦舞は、クスツと白い歯を少し見せて笑った。『料金は取れませんよ。度々、お家賃滞納している身ですので』夫はその後、帰宅した。寝込んである妻は、『あんたあ、何処行つてたのさ！私は体調悪くて、ご飯も作れんのやから、あんたが作ってくれんと：』大家妻は、当然と言う様に怒鳴った。『わ：わかったから。そうキーキー怒鳴るなつて。』とは言え、夫に作れる料理等、大して何もない。仕方無く白飯に卵をといて、粥を作つてやった。妻はじゅるっと下品な音を立てて粥を食べ始めた。音は、妻が食事をしている間に赤子を連れ出した。（子供に取り憑いた憑き物を管弦に祓つて貰えば、何もかも元通りになるさ：）夫は、赤子をおぶつて、管弦宅に急いだ。さて。街道沿いの竹林道を歩いている途中――。『お祓いなぞに行かせるものかあ：』ふいに低い男の声が背後でした。瞬間、もの凄い力で夫の首を絞めつけられた。『ぐあああつ：ぐ：わつ：』夫は白目を向き、手を必死にかきむしった。が、首を絞めつける手は、一層力を込めて首を絞めつけて来る。『ぐ：ああ：あ：』（―苦しい。死ぬ――）助けてくれと言った所で、誰も来てはくれまい。『――そこな者！その人を離しなさい！』闇を切り裂く様な若い女の声が響いた。瞬間、絞めつけていた手が不意に離れた。『がはっげほげほげほげほ』大家の主人は激しく咳込み、倒れた。そこへ素早く走って来た誰かが、背中にバン！と、お札を貼った。『御利益ある神

社のお札です。これで、あの物の怪は、あなたに近付けないでしよう。『管弦舞の声だった。管弦舞は、キッと前に向き直った。物の怪に取り憑かれた赤ん坊が、宙にフワフワと浮かんでいる。《…なる程…。良い女だ。お前が霊能者か？お前の様な、か弱い女に、俺様を祓えるのか？誰から見ても可愛い赤ん坊の俺様を…》管弦舞は、ふっと小さく笑った。『…ええ。そう。そなたは、ただの赤ん坊…。でも、オジンの声で、物申す赤ん坊は、素人の目から見ても化け物じゃ！』管弦舞は赤ん坊に、金欄の御守り袋を取り出して、粉を撒いた。《き…貴様っ！何をしゃがった？》『ふふふ…高野山の、ある由緒ある御神木の葉の擦り粉よ。そなたは、木に封じ込められたのじゃ。』赤ん坊の顔が般若の様な形相に変化した。《ちくしょお…出しやがれええ！女…貴様を絶対に許さんぞ…》管弦舞は『おやまあ…怖い顔をして、どうすると言うのです？今の妾にはそなたを木にするか、浄化するかは、容易い事。浄化したいとあれば、妾に従うのじゃ。因みに嘘をついても妾には、お見通しじゃ。嘘は無駄な事だと思われるが正しい。さあ！お前は一体どうしたいのじゃ』《……》悪霊は黙り込んだ。そのまま五分ほど悪霊と睨み合った状態が続いた。『…何故黙る？黙ると言う事は、浄化したくない。極楽へ行きとうない。そう言う事じゃなあ？』管弦舞は、青く光る水晶の数珠を取り出した。《ま…待ってくれ…。お…俺が間違っていた。俺は、極楽へ行きたいと思っている》『…それをお願いする前に聞いときましようか。何故、大家夫妻の赤ん坊に憑かれたのかを』《…俺は、竹林町南側にある、この大家の貸し出していたアパートに住んでいた。二十年勤めた会社をリストラされて、四十と言う年齢で再就職になかなか有りつけず、その内に体を壊した。鬱病と診断された俺は、寝込んで暮らす様になり、妻子に逃げられた。生活保護申請中で収入が無く、家賃を請求に度々やって来た大家に、俺は散々頭を下げ続けた。そんな俺に大家は、こう言い放ったのだ。

” ああ。四十にもなった中年男が、情けない。そんな情けない中年男だから、鬱病にもなって奥さんや子供にも逃げられますの

や!』……血が頭に登ってそのまま俺は脳溢血になりそのままポツクリさ。『白拍子・管弦舞は、目を閉じて黙って聞いていた。後ろで震えていた大家の主人は『な：なんまいだ：南無阿弥陀：』と懸命に手を合わせている。管弦舞は静かに言った。『貴方の言い分、世間は情けないと笑ったとしても、私にはよく解ります：。私も、大家婦人に毎月怒鳴られている。霊能者なんぞ、胡散臭い。インチキ商売だ。仕事のオフアが無ければ只の無職だとも：。全くもってその通り。でも人間ですもの。言われたら傷付く言葉の刃って有りますよ。私も幾度と泣いた事か。私には霊能力以外に何の取り柄も無い。こんな私に出来る事は、貴方を極楽へ送り出して下さる神様にお祈りするだけ：。』舞は小さな声で般若心経を唱えた。すると：水晶の数珠が、淡い桃色の光を發した。『我ハ：天界ノ使者ナリ：。神様ノ元へ、御案内致シマス』光り輝く聖霊が、悪霊を、包み込み、悪霊は尊い御魂になり『ああ：有難う。俺は神様にお会いし、生まれ変わる事を学んで来ます。憎かったとは言え、貴方の家族に迷惑をかけた。済まなかった：』御霊は、大家の主人に一礼し、光の聖霊と旅立って行った。―さて。あれから1週間後の事。管弦舞は、コンビニで肉まんを買って、自宅に帰って来ると、玄関前の郵便受けに分厚い封筒が入っていた。中を開けてみると、約、10万円のお札と手紙が同封されていた。〔拝啓・管弦舞様。数日前は、除霊をして頂き有難うございます。御陰様で我が子は前の様に、変わった事は全く無くなりました。今の所は ですが：。お祓いをして頂き、私は、管弦様の職業と霊と言う者を心底信じました。妻も、あれから帰宅すると、誠憑き物が落ちた様に、元通り元気になりました。自分でも、あの症状は何だったのかと、頭を捻って考えとります。ただ、事実憑き物祓いを管弦様にして頂いた事は、妻には話して居りません。ご存知かと思いますが妻は、霊だの化け物だのと、そういった話は全く信用しません。よって同封した札は、私個人のあの時のお札の料金です。うちの家賃の七万五千円を毎月支払い頂くお客様の事を考えますと、足元にも足りぬ不足料金ですが：。恐

れながら霊能者たる職業で有られると経済的に変化が上下すると察し致します。あの男の霊も言っていたように、妻の言動が借り主の方々を傷つけている事も察して居ます。ですが、ああ見えて実は情に厚い人間です。手荒な事はする奴では有りません。どうか、気に病まれず。また札は、あくまでも私個人の今回のお礼です。では今後のお仕事の検討を祈りまして失礼します」手紙を読み終えた管弦舞は、次に来る師走の冬晴れの空を仰いだ――――。

〈霊能白拍子管弦舞　・ 完〉

霊能白拍子管弦舞 其の弐『供養少女人形』（前書き）

滅多に仕事を依頼されない京都在住の霊能者 管弦舞。雅な成りの、この霊能者の元へ、青ざめた年配婦人が訪ねて来た。『あの…管弦舞様のお宅は、こちらでしょうか…』

霊能白拍子管弦舞 其の式『供養少女人形』

…師走の冷たい風が吹き荒れている。場所は京都の西の区。ここは、竹林が多い。竹林街道を左に逸れた暗い竹林の坂道を登っていくと、どこことなく陰気な住宅街になっている。この暗い坂道を真っ直ぐ歩くと、管弦舞の家である。正確には、古く薄汚い借家だが。家の中で、ホームセンターのクリスマスセール特集号を見ていた舞は、はーっと溜め息をついた。『嗚呼、やっぱりクリスマスは何かと物入りぢやなあ。欲しい物がいっぱいあるンぢや。この紫のベロアのコートも可愛いし、この紫のキャップもお揃いで良いのう…。あ、この口紅！私の欲しかったパールブロンズ！』管弦舞は、白拍子の格好をした霊能者である。髪は黒く長いストレート。一見では、かなり古典的な美人(?)なのだ。しかし、好む物は、やはり今時ギヤルの嗜好品だった。『うーん：この白いラビットフアーの、ストールも捨てがたいのう：』はぁーと長い溜め息をついた。そんな時、ふいに少し開けておいた障子の窓から、野良猫の金太郎が入って来た。『…姫。そんな、「ぐうたら」をしていては、なかなか金が貯まらず、この借家を出られませんぞ：』猫が人語を喋るのでは無い。舞には、霊力が有り、生物の意味が読みとれるのである。『ううむ…。そうじゃ！しっかりせねば…。来年こそ、この古めかしい借家を出て、キレイッな夜景の拝める、物集女町の広ーいマンションに引っ越したい』金太郎は不安そうに聞いた。『わ：我が輩は、あまり遠い所には、ついて行くのは嫌ですぞ。我が輩にも、この辺で慣れた友が沢山・居るのですからニャ：』舞は、ふふ…と苦笑いをした。そこへ。ーードンドン！玄関の戸を誰かが叩いている。舞は、少し警戒しながら、開けようとする、向こうから戸をガラリと開けて来た。『…こんにちは。こちらは、霊能者の管弦 舞様のお宅だと伺いまして…。是非とも、相談に乗って頂きたくて。あのう…舞様でしょうか』そう言い、玄関に入って来たのは、中高年…

五十半ば位の婦人だった。目の回りに、青暗いくまを作り、頬が痩せこけている。暗く、見るからに陰気な婦人だった。『は…はあ…。ドウゾ、中へ…』婦人の、あまりに重苦しい風情に舞は、少々気後れをしたが、室内に迎え入れてやった。熱い緑茶を出して、正面に縮み込む様に正座をして座る年配婦人の顔を、舞は遠慮がちに見た。すると『…随分、お若いですね』重苦しく黙っていた年配婦人が、不意に言った。このテの世代の中高年の婦人は、舞にとっては、非常に苦手な苦肉の種であった。『お若いですね』の言葉の真意は不明だが、言葉の裏を考えると、職業が霊能者である為（こんな若い娘に相談をして大丈夫なのか？ インチキではないか？）との不信感を投げかけられている様に取りれる。だが、舞は、敢えて平常心を保つ様に『ええ…。年齢だけは。』と苦笑いで応えた。そして『私は霊能者と言う看板を掛けて、目立とうと宣伝商売をしている者では有りません。ただ、私には、そう言う者が見える為、私の話を何処かで聞いた人が、こちらに普通ではない何かに苦しめられていると言う相談をしに来られますよ。』疑惑の目を向ける年配婦人に、舞は、ありのままを言った。年配婦人が言った。『そうですか…。除霊などして頂くのに料金…どの位ほど』舞は遮った。『謝礼金は、悩まれている原因を完全に解決出来た時に、頂いています。金額も決めては居ませんし。相談者の身になって一緒に考える事になっているので』舞が、そう言うと、年配婦人は微かに安堵の表情を見せた。『そうですか…。実は、霊能者の所へ相談に伺うのも今回が初めてで。不安でしたもので…。実は、管弦さんに視て頂きたいのは、これです。』年配婦人は、持っていた紙袋に入れていた高さ30センチ、直径5、6センチ位の箱を取り出した。箱を、青ざめた年配婦人が震えながら開けた。箱に入って居たのは、美しい赤い豪華な打掛を着た、垂れ髪の日本人形だった。が、片手が無い。舞は、突き刺す目つきをした日本人形の顔を凝視した。途端に髪を、引っ張られる様な寒気を感じた。『…』年配婦人は『人形は、私の年老いた母親が、高2になる私の娘に、誕生日にプレゼントとして人形店

で買ったんですよ。最初、ガラスケースに入って、丁寧な商品でしたもので、全員、気が付かなかったんです。片手が取れていると言う事に……』年配婦人が、ボソボソと陰気に俯いて、目だけで舞を見ながら、言った。舞は、『……ふうん……確かに、気持ち悪い人形ですね……。髪を引っ張られる様な寒気がしますもの』と言うと婦人が、糸が切れた様にうわあっと泣き出した。『……この人形が来てから娘が毎晩、寝てたら髪を引っ張られて、布団から引きずり出されると言っ、夜眠れないって部屋に閉じこもって、学校にも行かないし、食事も取らなくなつて、私……どうすれば……』舞は、驚いたが、気を取り直して、年配婦人に『あの、お母さん、落ち着いて下さい。しっかりして下さいよ！泣けば、人形が面白がりますよ！だから、泣かない！気持ちを大きく持たないと！』舞が叱りつける様に、取り乱す婦人に言う。鼻をすすりながら、婦人が何とか落ち着いた。『娘も、人形のセイで夜、眠れなくなったから人形は要らないと言つて、私に預けました。私は除霊とか供養等、お願い出来る霊能者を探していたら、管弦さんの噂を町内でお聞きしまして。』舞は『……うん……。事情は判りました……。やれる事は、やってみようと思います……』年配婦人が『どうか、どうか宜しくお願いします！』と数回、頭を下げて懇願した。舞が年配婦人に、住所と氏名、連絡先を聞いて、婦人は帰って行った。……さて。何から始めたものか。猫の金太郎は、『……ううむ……。この人形には……』と人形を凝視し、低く唸っている。舞は『……人形は窓口 みたいなものじゃ。表情が変わるから。何かが入ったら、ようわかるわ。』舞もまた、人形を通り越して別の者を見ている。金太郎は『……哀れな気も、しないではないがニャ……。』舞は、『……霊には、可哀想と思うよりは、どうしたいのかを聞く必要がある。ただ、素人が、霊にそれを聞くのは危ないがのう』猫は『……姫……。で、どうするんじゃ……。』舞は考え込んだ。と言うのは、人形自身が彼女を信用しない気がしていたのだ。『うん……。……食事にする。』猫は、ポカンと口を開けて、呆けた顔をした。『……は？』『今日は、もう、夕食にする。それから禊ぎ（

風呂)をして、休む事にするわ。』舞は、面倒臭くなったのか、靈とのコンタクトは、翌日にしようと考えた。舞は人形に念じた。『そなたの話は、明日伺う事とさせて頂きます。』と念じた。——ところが深夜の事。舞は、読んでいた本を閉じて、布団に入り、目をつむった。どの位時間が過ぎたのだろうか。急に、全身が痺れる、例の感覚があった。(あっ金縛り!)舞が、うろたえていると、突然、髪の毛がゾワツと何者かに掴まれ、引っ張られた。(きゃあっ)舞は、滅多に感じない恐怖感に駆られて、瞬間はつとした。(依頼者の娘さんは髪の毛を毎晩引っ張られたと言っていたっけ...)舞は、ええーい、何クソ、と渾身の力で足をバタつかせ、やっと金縛りが解けて起き上がった。振り向くと、床の間に飾って置いた人形は何喰わぬ顔で、佇んでいた。舞は、お香を炊き、青く光る水晶を持ちながら、人形の前に座った。『...お互いに手荒な真似は、やめましょうよ。貴女も、乱暴されるのは、嫌でしょうし。妾も、乱暴されるのはイヤじゃ。』優しく微笑みながら、言った。『話は、明日にしようと思っていたけど。貴女は嫌みたいね。今、聞いて欲しいと言うのなら、聞いてあげるわよ。貴女は、どうしたいの?』しばらく待ってみたが反応が無い。『...遠慮しなくていいのよ。だって、妾に何かして欲しいのでしょうか?と言うても。妾も人間。出来る事は限られているけど。』舞は、言葉が続けた。——すると。人形に重なって、幼い女の子が、《えーん えーん》と泣いているのが現れた。『さあ、泣くのはやめて。泣いたら、ウサギさんみたいに目が真っ赤になるのよ。泣いてたら、話を通じないんだからね』舞は子供に言った。《...ここ...何処?気がつけば、私、お人形になっていたのよ。お店に売られて、おばあさんに買われて、知らないお姉ちゃんの部屋に飾られてたの。お姉さんに気づいて欲しくて話しかけたけど。そのお姉さん起きてくれないんだもの。頭に来てお姉ちゃんの髪の毛引っ張って。懲らしめたら、お姉ちゃん怖がって。で、今度は、オバサンにオバチャンのお家に連れて来られて。》舞は、少しカチンと来た。『あ...あのね...妾はオバチャンじゃないの

よ。お・ね・い・さん！で、人形になる前は貴女、何していたの？」
《…わかんない。もう覚えてないよ》幼女の霊は、すっと座った。
（覚えておらんのか…）舞は青水晶の数珠の大玉部分を覗いて念じた。すると、ボンヤリ映像が移し出された。映像は、女の子と、その母親らしき女性である。『英乃ちゃん。貴女に、クリスマスプレゼントよ。』女性は、ケースに入っていた日本人形を女の子に手渡した。喜んでいた女の子は不機嫌になり『エノは、こんな人形要らないよ。もっとオシャレで可愛いドレス着たりカちゃん人形が欲しいって言ってたじゃない！こんな地味な人形、ミサちゃんに笑われるよ』拗ねた女の子は家を出て行ってしまった。『エノちゃん！』母親が女の子を呼び止めると、家の前を歩いてた女の子は、運悪くスピードを出して走行して来た乗用車に跳ねられた。直ぐに救急車で搬送されたが、出血がひどく、そのまま亡くなってしまった。映像を見終えた白拍子の管弦舞は、女の子に、『貴女、ママの所へ帰りたいんでしょう』と聞いた。《…うん！ママの所帰りたい！オバチャン…じゃなかった。お姉さん…ママの所連れてってくれるの？》舞は、『舞は、優しく微笑み、言った。『うん。帰ろう。で、英乃ちゃん』は、神様に一回会いに行かないといけないよ。』英乃ちゃんは不思議そうな顔した。《神様になんて…どうやって会えるの？》舞は『まあ、焦らなくていいよ。まずはママの所帰らないと。』舞は、英乃ちゃんの家を探す事を約束した。―さて。翌日。舞は依頼者の夫人に電話をかけて、人形を買った骨董品店を聞いた。教えられた骨董品店は、四条商店街にあった。舞は、依頼者の名前（野村）と名乗り、人形を売りに来た人物について聞いた。骨董屋店主は、用件を言わないと教えられないと言う。舞は『実はうちで、小さいお嬢様を預かっていまして。お嬢さんをお家に帰してあげたいんですけど、小さいし住所を知らなくて。それでお尋ねしたんです。』店主は、舞を珍し気に見つめると、『…ああそうですか。ええと…確かメモに、売りに来ると電話が来た時に聞いた住所があるハズですわ』店主がメモを探して、あったあったと舞に見せた。『買い

取り予約・前田泰子 京都市西京極…』舞は、人形を持って、西京極に向かい、問題の住所へ向かった。――午後5時。バスが込んでいた事もあって、いささか疲れたが、やっと住所の家にたどり着いた。英乃ちゃんの声が聞こえた。《お姉さん、ありがとう。ここよ、ここ。私の家》と喜んでいる。舞は少し深呼吸してから呼び鈴を押した。『はい…』出て来た、英乃ちゃんの母親らしき女性は、舞の姿に驚き、凝視している。舞は、市女傘・金烏帽子を脱ぎ、深々とお辞儀をした。『急に訪問してすみません。初めまして。洛西在住の、管弦 舞と申す者ですが。実は、貴女様が売られた、このお人形を骨董品店で買い物をされたお客様から、私の所に相談が有りました。お嬢様がお家に帰りたいと泣いておられると。』女性ははっと人形を見た。『そ…その人形…。あ…貴女は、何者…？』『私は管弦 舞と申します。占い師と言うか、そう言う仕事をしている者です。』母親の表情は警戒を強めた様だった。『結局、何を仰りたいの？』舞は、自分が人形を買った当事者では無く、第三者である故、うまく本題に入れない。困っていると『胡散臭い人ね。うちは確かに娘を亡くしていますよ。貴女は、占い師だか何だかと言って、人からお金を騙し取ろうとしてるんじゃないの？』舞は『お、お金なんか要りません！揺すりでも、脅迫でも何でも有りません！ただ、このお人形、事故で亡くなったお宅のお嬢様が、お家に帰りたいと。お母さんの所に帰りたいと。だからお人形を、ここへ連れて帰ってあげたいと、本日、伺ったんです。』《ママ…ママ？怒らないで。私がお姉さんに頼んでお家に連れて帰って来て貰ったの》『…英乃？本当に英乃なの？』舞は、数珠の大玉に念じた。《この大玉をお母さんに見せるから、ここに入りなさい。》英乃は大玉にずっと入ると、数珠が光出した。『あっ！眩しい！』母親が目を伏せると、《お母さん、よく見て。エノはここだよ》と英乃は言った。舞は数珠を、母親に手渡した。『？』母親が光る大玉部分を見ると娘の顔が映っていた。《お母さん、クリスマスプレゼントのお人形、

気に入らないって言ってごめんなさい。英乃、我が儘だった。神様にきつと怒られて、こうなったんだね」母親は、涙をポロポロとこぼし始めた。『英乃……』泣き崩れる母親に英乃は言った。《私、神様にも会って来て、謝って来る。もうこんな悲しい思いをしたくないもん。》『英乃……』《英乃、良い子供になる。良い子になるから、良い子になったらママ、また英乃を生んでくれる？」母親は、声を枯らしながら『必ず、生むわ。英乃がママの所に帰って来てくれるのなら……』舞は、般若心経を唱えた。すると数珠が淡い桃色に輝き、精霊が現れた。《我ハ……天界の使者。お嬢様を……神様の元へ才連レ致シマス》天使の様な精霊に抱かれ、英乃は言った。《きつと。約束してね。ママ……》『神様……どうか英乃ちゃんを導き、英乃ちゃんを再び、ママの子供としての人生を差し上げてあげて下さい。』舞は必死に祈った。……さて。後日。依頼者である婦人から、『これはほんのお礼です』と金額を受け取った舞。中には、約・十五万程が入っていた。『これ以上の金額は、ちょっと難しく……申し訳有りません。』舞は、苦笑いをした。まあ、半分は慈善職業であるのだ。舞の感覚では、それは人助けと言うよりは、霊助けの感覚の方が強い。冬晴れの昼下がり、舞は障子の窓を開けた。ひんやりと風が冷たいが、日差しが暖かい。舞は、はぁーっと息を吐くと、白い雲の様に浮かんで消えた。舞は、空を見つめながら、感じていた。英乃ちゃんのお母さんは、来年の今頃には、また新しい命を授かる様な気がする。そして、その新しい命は英乃ちゃんの生まれ変わり様な気がする。靈感の有る舞の先読みは、必ず的中するのである。不意に、猫の金太郎が部屋に入ってきた。《姫、寒い。中に入れて下されにゃ……》猫を部屋に迎え入れてやると、舞は、もう一度、冬晴れの澄み切った青空を眺めた。そして『おお……寒い！』と我に返り、窓を閉めた。

〈霊能白拍子管弦舞 其の二〉

供養少女人形） 完〉

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8754o/>

霊能白拍子 管弦舞

2010年11月16日23時56分発行